

JLTA Newsletter  
日本言語テスト学会  
The Japan Language Testing Association

JLTA Newsletter No. 12 発行代表者：大友 賢二 2002年(平成14年) 2月15日発行  
発行所：日本言語テスト学会 (JLTA) 事務局  
〒389-0813 長野県埴科郡戸倉町芝原 758 TEL 026-275-1964 FAX 026-275-1970  
e-mail: youichi@avis.ne.jp URL: http://www.avis.ne.jp/~youichi/JLTA.html



\*\*\*\*\*

さらなる創造の年：2002

会長 大友 賢二 (常磐大学教授・筑波大学名誉教授)

あの ILTA (The International Language Testing Association) と JLTA (The Japan Language Testing Association) が全力を注ぎ、つくば市に会場を設けて開催した LTRC 99 (The 21<sup>st</sup> Language Testing Research Colloquium) の年、それが 1999 年でした。JLTA 発足の実質的目標は、この LTRC 開催にあったわけです。その所期の目標を達成して 3 年を経た 2002 年の現在、JLTA はなお多くの新たな目標を掲げて前進しています。JLTA は、まさに、さらなる創造の時期に移り変わろうとしています。LTRC 99 のような大きな国際会議開催という具体的な目標を持っていない JLTA がこれから何を創造すべきでしょうか？ JLTA における 2002 年の最大の課題は、1999 年を振り返るのではなく、前を向いて走ることです。そのためにもっとも必要なことは、確固たる組織づくりをすることです。所期の目標を達成した JLTA が今後進むべく新しい道を開くには、この確固たる組織づくりが何よりも必要です。

そのために、2001 年 JLTA 総会においては、新しい委員会として、研究助成委員会と新事業運営委員会を発足させました。言語テストに関連する研究のさらなる発展、ならびに、新しい活動の推進を狙うものです。

このうち、研究助成委員会では、言語テストの新しい研究ができるだけ多く JLTA から生まれるように、設定する一定の規約に基づき、意義のある研究の助成を行えるようにしたいと考えております。これに関する委員および会員のご協力をお願いするものであります。また、今後計画される新しい事業内容もいくつか明らかになってきています。そうした新しい事業を統括するために新事業運営委員会を発足させました。具体的には、たとえば、この 3 月に UCLA の Lyle Bachman 教授をわが国に招いて行う「言語教育国際シンポジウム」が企画されています。それに対応できなければなりません。JLTA は、そのシンポジウムの共同主催の役割をすることにしております。また、昨年に引き続き、第 3 回 JLTA 言語テストワークショップの開催準備も進めております。内外の言語テスト研究の動向を深く考えることができるように、その準備に入っております。

このように 2002 年は、あらたな組織作りなど、JLTA にとってはさらなる創造の年であります。会員の皆様のますますのご協力を願うものです。



質問文

No.15 How long has Natsuko been in New Zealand?

- A. one week B. two weeks  
C. one month D. two months

No.16 In New Zealand, Natsuko wears a

- A. white shirt, blue skirt, black shoes.  
B. white shirt, green skirt, brown shoes.  
C. blue shirt, blue skirt, brown shoes.  
D. white shirt, green skirt, black shoes.

No.17 Natsuko says that in New Zealand, the skirt is

- A. long B. short  
C. expensive D. uncomfortable

分析の結果、No.15 と No.16 の 2 つは易しい問題に属することが判明し、No.17 は難しい問題であることが判明した。

このような結果になった理由やこれらのテスト項目を今後どのように利用していくかについては、教師の経験や判断が重要であろう。

報告者 廣瀬浩二 (明倫短期大学)

## 発表2 「英文読解における Schema Modification Test の開発」

卯城 祐司 (筑波大学)

スキーマ理論に基づく読解研究は80年代以降隆盛を極めたものの、全容の解明にはほど遠いとの例証から本発表は始まった。特に、英文の十分な背景知識を持っていても活性化することが出来ない場合の説明が不可能で、また、何故ある学習者はスキーマを容易に活性化でき、あるものは出来ないのかという謎は未解決のままであると論じられた。さらに、一文毎に情報が増加するにつれ、いかに最適なスキーマを選択し

ていくのかという点が全く明らかにされていないと力説された。そこで本研究発表では、英文読解におけるスキーマ修正プロセスを測定する2つのテストを提案され、優れた読み手と不得手な読み手にどのような差異があるのか、また、そのことにより、スキーマ構造や活性化プロセスについてどんな示唆が得られるのかをデータをもとに論じられた。

まず、It snowed a lot yesterday.という英文を提示され a) It was a warm day, so we enjoyed playing outside. b) It was a very cold day, but still we enjoyed playing outside. のどちらを推論するかを参加者に尋ねられた。ほとんどの参加者は b)を選択したにもかかわらず、雪国で生活したことのある経験者は a)を選んだ。雪が降るのはかえって寒さが厳しくない日が多いとの体験を語られ、スキーマの相違から英文解釈の相違が表れてくることをわかりやすく示され、学生たちに読解後の解答選択理由を聞くことの大切さを促された。現在開発中であるスキーマ修正プロセスの測定テストに関しては、同じテーマや語彙を説明した複数の英文を順に示され、どの英文段階で被験者はスキーマを修正し、正しい答えを導き出しているかという実験報告がなされた。優れた読み手ほど初期の段階でスキーマの修正がなされていることを示され、最適なスキーマを選択していく修正能力の高さを、作動記憶との関わりや、引き出す記憶構造の違いなどから解説された。現在、英文読解によるスキーマ修正プロセスが、単に背景知識や英語力の差異から来るのではないことを突き止めていく更なる研究をすすめているとのこと、今後の研究成果が大いに楽しみである。

報告者 平井明代 (筑波大学)

## 第6回(2002年度)全国研究大会 ご案内と発表者募集

大会テーマ: Language Testing and Second  
Language Acquisition Research  
(言語テストと第二言語習得研究)

基調講演: 「実践的コミュニケーション能  
力」考 - 到達度設定をめざして -  
講師: 青木 昭六 (愛知学院大学)

日時: 2002年10月20日(日) 8:30 ~ 18:00

会場: 東京経済大学6号館、〒185-8502  
東京都国分寺市南町 1-7-34

参加費: 会員 1,000円、一般 3,000円

研究発表: 発表(30分)、質疑応答(10分)

研究発表申し込み:

研究発表希望者は、発表概要(英語の場  
合: 250語、日本語の場合: 500字)を  
e-mailにより、必ず次の2箇所両方に送  
付してください。1) nkyj@tku.ac.jp (中村  
優治) 2) toinby@parkcity.ne.jp (飛渡洋)。そ  
の際に次の事項を必ず明記してください。

1) 発表者氏名、2) 発表者所属機関、3) 発  
表題目、4) 発表者連絡先(e-mail address)。  
なお、e-mail送付の際の件名は「JLTA2002  
研究発表申し込み」でお願い致します。

発表概要の申込期限: 2002年7月20日(月)

発表概要審査結果: 2002年7月31日(水)  
までにe-mailにてご連絡致します。

展示について

申込期限: 2002年9月20日

費用: テーブル一脚につき、賛助会員は  
20,000円、一般は40,000円。

公告について

版下送付期限: 2002年7月20日(事務局  
必着)

費用: A4サイズ1ページが、賛助会員は  
10,000円、一般は20,000円。半ページが  
賛助会員は5,000円、一般は10,000円。

展示・公告の詳細については、事務局に  
お問い合わせ下さい。

## LANGUAGE ASSESSMENT ETHICS CONFERENCE

Dates: May 16-18, 2002

Location: Sheraton Hotel, Pasadena, California

Hosted by: California State University, Los Angeles

Partially funded by: TOEFL Grant Award

Keynote speakers: Sharon Bishop (*California State  
University, Los Angeles*), Alan Davies (*University  
of Edinburgh*)

Other Presenters (include):

Liz Hamp-Lyons (*Hong Kong Polytechnic  
University*), Fred Davidson (*University of Illinois,  
Urbana-Champaign*), Brian Lynch (*Portland State  
University*)

General topics for presentation:

Ethics and fairness, Ethics and test development  
and use, Ethics and social responsibility, Ethics,  
professional conduct and standards, Ethics and  
training assessment professionals, Western and non-  
Western ethics and assessment

The following abstract, submitted by Professor  
Randy Thrasher, has been accepted by the organizers.  
And Professor Randy Thrasher will make a  
presentation at the conference, as a representative of  
the JLTA.

-----  
'The role of a Language Testing Code of Ethics  
in the Establishment of a Code of Practice'

After the ILTA Code of Ethics was adopted, the  
then ILTA President, Alan Davies, asked the Japan  
Language Testing Association (JLTA) to try to  
develop a code of practice that would be suitable for  
Japan. The task has turned out to be more  
formidable than first envisioned, but work is  
progressing. This paper reports on the progress that  
has been made and especially the role the ILTA Code  
of Ethics has played in deciding what to include in a  
code of practice and how to justify the practices we  
have included. This paper explores the claim that  
justification on grounds of being good testing  
practice or fitting current test theory does not provide  
as effective an argument with test developers and the  
test using public as ones based on test ethics. The  
relationship between the ILTA Code of Ethics and  
the JLTA Code of Practice will be illustrated with  
examples from the draft code that is being developed  
by JLTA.

Randy Thrasher (*International Christian  
University*) JLTA Vice President, Chair, JLTA  
Language Testing Code of Practice committee

## 言語教育国際シンポジウムのご案内

ライル・F・バックマン博士 (米国カリフォルニア大学ロスアンジェルス校教授) が文化庁のプログラムにより招聘される機会に、「コミュニケーションにかかわる言語能力テスト開発と測定・評価」のテーマにより国際シンポジウムを以下により開催します。

バックマン教授は、応用言語学者として言語学分野において理論面、実践面、教育面で中心的な役割を担う一人であり、現在最も精力的に活動している研究者の一人です。

ご関心のある多くの方々の参加をお待ちしております。

主催：(社) 日本語教育学会、国際交流基金  
関西国際センター、大学英語教育学会、  
日本語テスト学会

開催日時：2002年(平成14年)3月21日  
(木・祝日) 午後1時～4時  
開場：12時30分、開会：午後1時

会場：学術総合センター2階  
中会議室2～4  
(東京都千代田区一ツ橋2-1-2)

交通：営団地下鉄半蔵門線「神保町駅」、  
都営地下鉄新宿線・三田線「神保町駅」、  
営団地下鉄東西線「竹橋駅」

シンポジウムのテーマと内容

テーマ：「コミュニケーションにかかわる  
言語能力テスト開発と測定・評価」

パネリスト：

ライル・F.バックマン Lyle F. Bachman  
(カリフォルニア大学ロスアンジェルス校)  
大坪 一夫 (麗澤大学)  
森戸 由久 (創価女子短期大学)  
静 哲人 (関西大学)  
庄司 恵雄 (群馬大学)

司会：

伊東 祐郎 (東京外国語大学)  
石川 祥一 (松蔭女子大学)

通訳 [質疑応答のみ]

木下 徹 (名古屋大学)

参加料：1,200円

(主催学会の会員は1,000円)

参加申込：

参加希望者は、(1)氏名、(2)所属先、(3)所属学会名、(4)連絡先、(5)電話番号 (Fax, e-mail アドレス) を明記して、2002年3月1日(金)までに、往復はがき、Fax またはメールにより、下記あてにお申し込みください。電話での申し込みはご遠慮ください。

〒101-0065 東京都千代田区西神田2-4-1  
東方学会新館2F (社) 日本語教育学会  
Fax 03-5216-7552

E-mail nkg@mb.kcom.ne.jp

先着順に受け付け(定員150名)。参加希望者多数によりお断りする場合があります。  
参加料は当日会場受付で申し受けます。

なお、続いて3月23日には、バックマン教授の講演会、24日には「テストの設計と作成」と題したワークショップが開催されます。

お問い合わせは日本語教育学会へ。

詳しい情報は日本語教育学会のウェブページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/nkg/menu-news.htm>でもご覧いただけます。

